
逢魔ヶ月

Ichitoe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔ヶ月

【Nコード】

N9543Z

【作者名】

Ichitoe

【あらすじ】

大貴族の御曹司ソロモンは

花街にて魔に出会う

美しく爛れたそれは

艶々と毒を湛える月だった

す)
*) 自サイトであるHosokawaWorldに掲載しているもので

（前書き）

稚拙なものですが見ていただければ幸いです

欠けた月。満月よりも少しだけ新円から外れた不完全。確か既望といったか。

満月よりも一つ齢を重ねている。

それが雲ひとつ無い澄み切った暗夜に玲瓏と浮かぶ。

なんと、壮観なことだろうか。

星々も確実に己を主張してはいるのだが、

その月を見る者を魅了してやまず美しさを彩る添え物と化していた。おそらく先日の満月の日が、生憎の曇り空で美しい威容を眺めることができなかったからであろう。

道行く人々も呆と眺めるものが心なしか多い。

その中の一人だった目の前の商人風の男が、

首を振りながら視界から消えたところで自分も歩き出す。

普段は齷齪と働く商人も瓏とした銀月には魅入られていたようだ。

思わぬ寄り道をしてしまったが、

そもそも寄り道をしていた場所が、目的地の目の前であつたからさして問題は無い。

今まで突つ立っていた場所の目の前にある門を潜る。

歩き進む中庭は中流以上の貴族家か、

大商人の邸でしかお目にかかれないような豪勢なものだ。

暫く訪れていなかったうちに、

季節が一つ変わってしまったようで若干の模様替えが見られる。

木々もいつのまにか深緑とは云えぬ姿になっていた。

これでは、”あの女”に朴念仁だのと呼ばれても反論できぬ。

呼ばれても、さして気にはしないのではあるが。

辿り着いた玄関口では、

きつちりと礼装を着こなした初老の男に出迎えられる。

「この度はどのようなご用件でございましたか」

単刀直入にいつも通りの問いかけ。

「月を…愛でにきた」

そして、いつも通りの返答。

変わらぬ問いかけに私が応じると、

男は無言で頷き巨大な扉を軽く小突くように叩く。

これで、館の内部に客が訪れたことを知らせるのだ。

もしかすると、叩き方で誰が来たかも分かるのかもしれない。

一度も、面食らったような対応はされたことがないのだ。

それにしてもこの合言葉にも大分慣れてきたなと思う。

”あの女”に紹介されて訪れた初めの頃は、

気取った言い回しに面映い思いをしたものだったのだが。

それはともかく、

いつものことながらこの老人は見事にあの一言しか喋らないし、私にもあの一言しか返させない。

娼館の門番とはここまで無口でなければ勤まらないのだろうか。過剰に愛想よくされた方が不愉快ではあるものの納得はできる。

他の娼館を訪れたことの無い身には分からない。

それだけのために他の娼館に行くのも意味がない。

無論、必要のないことではある。

「これはこれは。久方ぶりのお越しで御座いますね閣下」

音も無く開いた扉からは、

これまたきつちりと礼装を身に纏った如才ない笑顔の男が現れる。

名はたしかテオドル。

ここの娼館 ”宵待月夜”の案内役だ。

商売人の笑顔とは思えないほど、

素晴らしい笑顔の彼と言葉を交わしながら館内へと入る。

会話が必要なわけではないが、「1」なにか落ち着かない。

感じてはいなかったが、

間接的にはあるものの、人間を扱うことに後ろめたさを覚えているのかもしれない。

「前に来たのは、何時だったかな」

そのような、動機で始める会話には意味を持たせることなどできない。

よって、自分でも把握しているようなことを訊いてしまつ。

元々口下手であるから尚更だ。

「はい、確か三月と少しだったかと」

そんなに長い間来なかったという意識は無かった。

私自身の感覚では多くて一月ほどだと認識していた。

把握しきれていなかったのだから、

無駄ではなかったわけだ。

別の問題が表出してしまつたが。

「ところで、今夜は如何いたしましょう。

まずは、音曲舞踊を楽しみますか？ 皇宮にも負けないと自負しておりますよ。

そうそう、先日ですが東方の島国より来た者達がいましたね。

こちらの文化とは違った育ち方をした所為か、

珍しい踊りをいたします。

確か、あちらの言葉ではマイと申すとか。

当たり前ですが思想も違うようでして、

会話一つとっても中々に楽しめますよ」

テオドールの口は止まらない。

私が来る度に新しい情報を持っている。

それは、新しい妓の話であったり

娼姫の誰々の機嫌が悪いという愚痴めいたものであったり、

果ては隣国の失政に関するものであったりと幅広く、多彩だ。

貴族であつたとしても並の者では太刀打ちできまい。

後ろ暗い世界に身を置き、蔑まれようと彼は一級的能力を持っているといえる。

「いや…遠慮しておこう。シャーリイの館に先客はいるかな」

この場でシャーリイ以外の相手を頼んだことはない。

それも、”あの女”のすすめであるのだからなんともはや。まるで、母親と幼子のようにではないか。

少し、呆れる。己のことくらい己で処理できると思っていたのだが。

「はい。歌姫シャーリィで御座いますね。

彼女は移り気ゆえ如何なる応えがくるか分かりませぬが…。

閣下が来た場合にはいつでもお通ししろと……こちらへ」

云つて。扇状に来訪者を出迎える階段の要の部分にある扉に案内する。

たかだか、十七の小僧によくも冷静な反応ができるものだ。

仮令商売であつたとしても虫の居所の悪いこともあるう。

私自身は頭を下げねばならぬ相手が極々少数なので、考えられない。

その扉を抜け通路を直進すると、また扉。

それを抜けると涼やかな風が吹く娼館の裏手へ。

涼風が身に心地好い。

「それでは此方の舟にお乗りください。船頭が歌姫の館にご案内致します」

辞儀をしたテオドールに頷き小さめの舟に乗る。

進みだした小舟に腰を下ろしたときに声をかけられた。

今夜が、貴方にとって　佳い夜でありますように

/

小規模ながら海にも流れる川の中程を、円く広げた湖のような場所を進む。

この先の中洲に”宵待月夜”どころか、都でも一・二を争う妓女シャーリィの構える邸がある。

歌姫や舞姫級の娼婦ともなれば自分の邸を持っていることなど珍し

くもない。

しかし、このような孤島ともいうべき場所に住んでいるのはさすがに彼女しかない。

それだけ、彼女が重要なポジションにいるということだ。

初めて娼館に来るような若造や、

花街の内でも女郎買いが行われるような場所に出入りする者には信じられぬだろうが、

此处……高級娼館“宵待月夜”のような場所では、妓が客を拒否するという事態がまま生じる。

生まれた頃からもしくは幼い頃から磨かれ続け、今も己で磨き続ける彼女達は総じて誇り高い。

そのうえ、気分屋だ。

一見者や粗野な者、その他彼女達の氣に入らぬ者は貌すら見せてもらえない。

それまでに文を交わしたり、信用の持てる人物からの紹介が必要なのだ。

勿論、歌姫や舞姫と称えられる者達はほんの一握りではあるのだが、それにしても今夜は月が映える。

湖上に反射する月も普段とは違い一層輝きを放っているような気がした。

普段は月や雲など氣にも留めない自分が何度も、

見上げるくらいだから今宵の新円の美しさも推し量れようというもの。

月を眺めている間に中洲に着いたようだ。

先に降りた船頭が無言で辞儀をして手を差しのべるが、手を振って助けの要らぬことを伝える。

なぜだか手を触れるのは氣が引けた。

別に、見下しているというわけでもないのだが。

小舟から降り、小道を進んでいくと“宵待月夜”にいたような門番が開けた邸に入る。

勿論、この館も”宵待月夜”の持ち物なのだろうが、これより先はシャーリーの世界だ。

調度の趣味や、使用人の質まで責任を彼女が持つ代わりに、娼館が全力をもって揃えている。

邸の移動にも彼女の選んだであろうメイドに案内される。

直接名前を訊ねたことはないが、

たまたま、シャーリーがソフィアと呼んでいたのを耳にしたことがある。

私がこの館を訪れたうちの半数以上が彼女の案内によるものだから、おそらく、客の案内はほぼソフィアの仕事になっているのだろう。

「実は、三日程前にさるお方がお越しになられたのですが、

お気に召さなかったのか機嫌が悪かっただけなのか、

島に娼館の方を通す前に自室に引き込もってしまわれるということがあったんですよ」

ソフィアは中々お喋りなところがある。

加えて仕える主人に誇りを持っているらしい。

そうなれば自然に、無愛想な自分が知っている彼女は、

主人の生活について嬉しそうに語るところだけだ。

「お会いになられてもいないし、そもそも娼館の方の訪問も断って上陸させなかったのですから、

気に入られないというわけでもないのにどうしてだったんでしょうね」

シャーリーの気分はあまりよくないらしい。

少なくとも三日前までは。

「大体ですね、ここ三ヶ月どなたの訪問も受けていらっしやらないんです。

もちろん、粗暴な方やお金にものをいわせてくる方は嫌でしょうけど……」

たまには許してくれないと……って”あちらの館”の子がぼやいてました。

”宵待月夜”は客を取らない娼婦を飼っているのか、
つて難癖をつけてくる方もいるみたいです。

失礼な話ですよね。シャーリー様はそこいらの畜生とは違うのに「
結局は主人を擁護してしまうあたり、

ソフィア自体は主人に不満はないようだ。

本館にいる小間使いかなにかが云っていたのだろう。

「三ヶ月といえば私が来たのもそれぐらいだな」

それはなんとなく口を突いた呟きだった。

ソフィアに反応を求めていることではない。

しかし……

「はい。閣下は気に入られているようですよ。

以前にお越しになった方は閣下ですもの。

そもそもどんな時でも体調が悪い時でも、

館まで案内しなさいと云い付けられています。

無条件で御許しになられるとは、あのシャーリー様にしては破格で
すもの」

そんな、命令を出しているとは。

そういえば、テオドルもそんなことを云っていたことを思い出す。

「あつ、もちろん閣下が魅力的だからだと思います。

僭越ながら私と同年ぐらいでいらっしゃるしょう？

その私から見てもとっても魅力的ですもの」

どうやら、私に対して破格だと云ったことを不敬だと思ったらしい。
あわてて、付け足す。

慌てを晒した方がより不敬だと思うのだが。

そもそも、私は不敬に聞こえることに気付いてもいなかった。

気付いたソフィアが少し過剰なのだ。

「気に入られているわけではないと思うが……」

気にしていないと云ってやったところでソフィアは気にするだろう。

主人の大事な客を貶して主人の顔に泥を塗ってしまった、と。

それならば、話自体をなかった事にしようとして反応していなかつ

た、

別の会話に対応する。

しかし、その時には主に忠実なメイドは仕事に戻っていた。

「着きました」

眩きは聞こえなかったようだ。

まあ、問題はないだろう。

ソフィアの性格を考えてみるに大きな悩みとせずにすぐに立ち直るはずだ。

扉を開けてくれている彼女の隣を通過してシャーリーの待つ部屋へ入る。

今宵の歌姫は機嫌がいいだろうか。

/

「ああ、久しぶりねえ。もうこないと思っていたわ」

珍しい東方のテーブルの前に座っている女。

“宵待月夜”どころか、大陸の裏を少しでも知る物なら知らぬ者と無い美貌。

しかし、まみえることのできる者はほんの僅かという一国家の姫の如き地位にいる女は随分と言葉が軽かった。

乱暴や粗野であるというのではない。

やや、庶民のような雰囲気さえ感じる親しみやすさ。

それは、ここまで上り詰めた妓の計算なのだろうか。

他の客に対しては雅な言葉で応対していると聞いたことがある。

私専用に切り替えているのだ。

普段は公爵である父の命で騎士団で活動している自分の周囲には、雅な事柄が少ない為慣れておらず接し易くてよい。

「西へ行っていたのだ。少々……問題があつてな」

とりあえず、対面に腰掛けながら応えを返す。

その雑事が終って三ヶ月振りの都に帰ってきてみれば、己に深く関係する要件が急遽増えたのでそちらも処理した。

その、直後にここにきたのだから、

どちらかというと彼女に執着しているような気がしなくてもない。

執務の後にすぐに来たのだから、

好色な男だと思われるいてもおかしくないという認識だった。

足繁く通っている意識も持っていたのだが。

そう、説明するとシャーリーは随分と甲斐性の無い男だこと、と云って笑った。

「女に会おうと思ったたら大陸の反対側にいてもすぐに実行しなくちゃ。」

あの子なんて・・・辺境伯の…確か、ガデッサ伯だったかしら。

二月に一度はくるんだから。領地経営は巧くいつているのかしらねえ」

本館の使いを上陸させさせなかった割に、情報だけは持っている。

やはり、一つの世界で上り詰めるためには情報というものが不可欠なのだろう。

おそらく、経営状況も把握しているに違いない。

「その男には断りを入れたのだろう？なぜだ、金にものをいわせてきたか」

その男のことは知っている。

ガデッサ伯シャルト。

直接会ったことはないのだが、

領地での評判はまずまずでそれなりに有能だ。

帝国貴族のうちでもかなり名門の青年貴族で、

南部きつての人格者らしいがことのほか女好きであるらしい。

私の二つ上だったはずだ。

「貴方に操を立てた　と云ったら信じるかしら？」

艶のある笑みに思わず失笑する。差別するわけではないが、

客に操を立てる娼婦などいまい。

私の苦笑を見てシャーリイも自身で失笑している。

そもそもこちらは妓と仲良くなりきたのではない。

自分で云っていて可笑しかったのだろう。

どれだけ、取り繕っても逃避しても尊厳を傷つける行為をしにきているのだ。

ただの、客に心を開く娼婦は少ないだろう。

まともに付き合ってくれると思う方が間違っている。

情夫と共に逃避行をするなどというのは御伽噺の中だけだ

しかも、彼女ほどになると娼婦だからといって年季に縛られているわけではない。

いうなればその世界しか知らない。ということが。

「彼も私のことになんて興味ないのよ。」

「お相手は別の娘」

「あの、歌姫シャーリイがただのおまけだと？」

「ええ、彼には親戚の貴族家に奉公に出した領民の娘がいてね、その子に会うために都に激務の間を縫ってくるんだけど、

ばれたくないのね」

それは、まずいだろう。

名門貴族と領民の恋などそれこそ御伽噺だ。

「だから、私に何度も振られる振りをして何度も来ているわけ。私なら随時引く手数多だから、

カムフラージュには丁度いいでしょう？」

あいつも馬鹿なやつだ、ってね」

驚いた。領地でなにがあったか知らないが、そんなものが実在するとは。

それにしても、自分で引く手数多だというのだから謙遜なものもない。正しい理解ではあるのだが。

「彼が貴方ぐらいの歳のときから縁があつてね。」

最後に来たときにこれからは全部振ってくれて頼まれたのよ」云って、悲しそうに眉を寄せる。

気分屋の彼女が理解を示す位だからお気に入りだったのだろう。

何割かは媚態だとしてもまるつきり嘘というわけでもない気がする。

「しかし、そんなことを私に喋ってもいいのか？」

ガデッサ伯との秘密なのだろう？」

「貴方なら問題ないわ。

名家出身とはいえそんなところにつけこんでまで追い落とすほど彼は勢いが無いし、

なにより帝国最大貴族御曹司の貴方がそんな卑怯なことをするわけないでしょう？」

”卑怯なことをするわけがない”か。

極太の皮肉。隆盛を極めた貴族で”卑怯”に無縁な者などいないだろう。

しかし、私の家がそれを比較的使わなくてよいのは確かだ。

建国功臣の家柄で、皇室と幾重にも絡んだ姻戚関係は伊達ではない。なにしろ、開祖の王妃の兄の直系一族なのだ。

「そんなことよりも、今日は訊きたいことがある」

そう、それが主目的なのだ。

娼館に抱くこと以外の目的で訪れたことなど初めてだ。

「いやあよ。前に来たときに琴を弾く約束したじゃない。

三ヶ月も待たされたんだから無粋なこと云わないで」

仕方ない。ここで機嫌を損ねられてはかなわない。

用意してあったらしい龍弦琴を借りて試しに弾く。

中々に佳い音だ。さすがに歌姫の選んだ業物だ。格が違う。

「……得手ではないから、期待はするな」

音。というよりも琴が持つている雰囲気がいいのだ。

職人に調律させてメイドなどに手入れさせているのだろう。

このようなもので稚拙なものを聴かせるのは忍びないが、致し方ない。

これで満足してもらえないならば仕方ないが出直しとなるだろう。
気合を入れと思ったたより高揚した。

これならば、ベストを尽くせる。

「では．．．．．」

詩を奏でるのだから。

不得手な自分は緊張すると思っただが違った。

不思議と気が軽い。

ちらりと見たシャーリィの微笑は揺るがない。

私を太陽だと云って下さる貴方は

星達を従える美しい銀月なのでしょう

人が見ぬ間も月は太陽に照らされています

しかし月は太陽に対し

応えませんし逢ってもやりません

そんな幻想世界の彼らと

現世の私たちに

なんの違いがありましたよう

貴方は無理矢理にこじ開けた私の心に

想いを流し込んだだけで

私からはなにも受け取ってくだらない

つまり私の想いには応えてくだらない

それはなぜですか？

ねえそれはどうして？

太陽と月にだって一度くらい

逢瀬を許してやってもいいでしょう？

せめて一度だけでも

お願いいたします

私が与える側になってもいいでしょう？

「この曲の詩を知っているのか？」

龍弦琴を鳴らし終え開口一番訊ねる。

まさか、彼女が即興で詩を拵えたわけではあるまい。

あれは知っている感じだった。

懐かしむような、淡い感情の発露。

「……ええ」

言葉少なにかえして目を伏せる。

なにか思い入れでもあるのだろうか。

「この曲はな父上に教わったのだ。

その時に私の母上がつくったのだと云っていた。

やや、稚拙な詩だが都で流行ったことでもあるのか？」

優しさなどついぞ見せてくれぬ父が、
穏やかに接してくれた数少ないひと時であつたから、良く覚えてい
る。

”ソロモン。これはなお前の母親が幼き頃につくつた詩だ”

いつになく嬉しそうだつた父が嬉々としておしえてくれたのだ。

一度しか聴かなかつたがそれで覚えてしまった。

子供心にもそれだけ珍しく思つたのだらう。

父母の不仲は国中に知れ渡るほどに陰悪だったのだ。

「なんだか感動しちゃって。

つい、詠っちゃった。

普段はふざけた神がどうだの愛がどうだのって、寝物語とか格式ば
つた舞踊ばかりだもの、

たまには素朴なものもいいわね」

応えにはなっていないが少し引つかかった。

「神を信じていないのか？差別だと思つてほしくないのだが、

お前達のようなものは信仰などにしか縋れないものだと思つていた」

彼女の口調には異国の神々の神話を嘲るような響きよりも、

神の御子や、ひいては主その人を蔑むような様子を感じたのだ。

「貴方ね……。他の子は知らないし知つてどうなるっていうものだ
けど、

私は教義を信じてもないし信仰心も持っていないわ」

ちいさな頃は持つていたかもしれないけれど。と嘯く彼女も少
女の頃は確実に信じていたはずだ。

「私は教義自体が気に入らないのだけれど……

そうね、それで救われる者もいることは認めましょう。

それでも、私には信じることはできない。救われないもの。

これだけの痛苦を背負っているものたちを神の地上代理人である教
会は救つてくれない。

それだけじゃなく埋葬と葬儀を拒否するのよ？娼婦は身体が穢れて
いるという理由でね。

そんな人間の親玉が私たちを救ってくれるとは思えないもの」
それが、どうした。

主を信じないならば死後など、どうでもいいであろう。
天界や終末も意味をなさぬということなのだから。

しかし、それを言葉にするのは憚られた。

本当に信じていない、否。信じていたいと思っていない者は、
わざわざ信じていないなどと語らないだろうと気付いたからだ。

信じない理由を挙げるということはそれがなければ信じるといふこ
とと同義だ。

しかし、実を云えば私も似たようなものだ。

神やその御子は平等を謳う。

大いに結構。それは人間の理想だろう。

なんら問題はない。

ただし、それが”結果の”平等であるという点だけが断じて認めら
れない。

その一点だけがどうしても認められないのだ。

機会の平等ならばまだしも。

終着を同じにするなど生きるという意味を根底から覆す故に嫌悪す
べきだし、

それならば、終着が内包する始まりの尊さを蔑ろにしているではな
いか。

「c t」

「まあ、いいわ。興が乗った。寝物語とはいえないけど。一つ語っ
て魅せましょうか」

他人に中を滅多に覗かせない瞳には容易に読み取れる懐古があった。
嫌なことを思い出して話を断ち切りたかっただけかもしれないが、
それでも構わない。

優雅な手を伸ばされる。心得て、琴を卓に置き、大人しく寝台に誘
われた。

私の用はことが終わってからでも遅くはあるまい。

「ある所にちいさな女の子がいました。

これは彼女の人生で最大のミスのお話です。

彼女は娼館に買い取られた子供でした。

そんな不幸ではあるけれどありふれた少女の話です。

ある日の夜。その時が初めてというわけでも無く、

長い間仕込まれていたにもかかわらず、

いざ”それ”の直前になって客の前で致命的な一言を漏らしてしまったのです。

こわい　と。

”そうした”趣味の外道なだけの客であれば、

逆にそそられていたかもしれません。

しかし、客の男も少女の相手をすることに罪悪感を覚えていたのかその手を止めて訊ねてきたのです。

そして、訊いてしまいました。

誰がだ？　と。

何が、と訊かなかったことに意味は無かったのかもしれませんが。

しかし、その時の少女は長い間溜め込んでいたモノを吐き出したかった。

だから、答えてしまったのです。

兄さんが　と。

優しい口調で少女の”元いた”場所を聞き出した男はその晩何もせ

ずに帰りました。

その次の日も訪れた男は今度は少女に相手をさせました。

その時は、行動の意味が分かりませんでした。後になってとある噂が伝わってきました。

近くの村の小領主の跡継ぎが惨殺されているのが発見された、と。

少女は我知らず涙を流していました。

仮令幼き頃から蹂躪されていたとしても、

博打の借金の形に売られたとしても愛していたのでしょうか。

血のつながった兄妹だった人間が死んだからか、

それとも男の意味も意義も無い殺しの所為なのかは分かりませんが、

それが、少女の人生で最後の涙になりました。

その後はなにもありません。

相変わらずその男は訪れるし、少女の境遇は変わりません。

それでも、たまには思い出すこともあります。

あの、とある夜のことを。これは、ただのどこにでもいる少女のお話です

「

語り終わった女を強引に引き寄せる。

最後の言葉の呼吸を引き摺らせながら、

呼吸ごと彼女を強引に奪った。

怒りがあった。何故そんなことを云うのかと。

私が昨日一日煩わされた”雑事”の大元を理解してしまったがゆえに。

その後は、私が私であった枠がひしゃげ

短絡した自分が別のモノに支配される感覚だけがあった。

/

月が、見えた。

”こと”が終わった後の気だるい時間。

呆とした頭が覚醒し始めた頃に見えたのは銀円だった。

見えた、のだ。

それまでも同じ方向を見ていたはずだが、

見えていなかった。

認識されるものなものなにもないときもあるのだなと気付いたのは最近のこと。

その月を見ていると、怖くなってくる。

うつ伏せになり上目遣いで眺めた月は何故か騒と胸騒ぎがする。

だからといって、

これ以上、用件を先延ばしするわけにもいくまい。

それが今夜の主目的。

娼館に妓を抱きにくる以外の主目的を携えてくるとは、

自分でも不思議だ。

「なあ、少しいいか」

「なあに、疲れているんだけど」

私と同じくうつ伏せで横たわるシャーリイが拗ねたような表情をする。

「約束だろう？先程は琴の約束があったから先送りにしただけだそれが終われば今度はこちらだ」

「ふーん。その割には貪ったものねえ」

「それは 覚えていない

本当に記憶にないのだ。

我を忘れてしまう。

確かに貪ったという表現が当てはまるような姿だったのだろう。

実をいえば。いまだに彼女が欲しい。

彼女の肉が。

疲れすらも、爛れた美しさに昇華される稀有な女。

いくら朴念仁といわれようと、欲しい。

それでも私にはやらねばならないことがあるのだから。

「まあ、いいわよう。大事なお客様ですものねえ」

「すまない」

「約束約束って迫るのはいただけないけれど」

最後の言葉は聞かなかったことにする。

この分ではいつまでたっても切り出せない。

「まず、一つ。

私の父上の相手もしたことがあるだろう？」

「まったく．．．。女と寝台の上にいて他の男の話を始めるなんて。

本当に朴念仁どころのレベルじゃないわね。今度からはやめること」

覚えておきなさい？

そう云った表情は、まるで変わらず微笑みを湛えている。

「それで．．．あるのか？ないのか？」

「しつこいと嫌われるって云ってるのに。

あるわよ。だからどうしたの。

父子の相手をする女は薄汚いとしても？

自分のセンサイな心を返せとでも？」

そのようなことが問題などではない。

庶民や家格の低い貴族家は知らないが、

近親婚などのほうが一般的な場合すらある私にとってはどうということもない。

父に降嫁してきた母も従兄妹同士だ。

今の問いは一つのけじめ。

私が自分の考えに自身を持つための一点だ。

「そうではない．．．。確めたいことがあったのだ。

それと同じ目的で私は昨日チャンドラという村に行っていた」

”あの女”に不愉快なことを吹き込まれて行ってしまったのだ。行きたくはなかったが行かねばならなかった。

「待つて。貴方の云いたいことはなんとなく分かった。その前にわたしにも答えてくれるかしら」

「ああ、構わない」

一体何を訊くことがあるのだろうか。

「"そのこと"を調べようと思った切っ掛けはなに？」

私が"あの女"に吹き込まれたと説明すると、

シャーリーは一度目を閉じて深い溜息をついた。

あの女と面識があるとは思えないのだが。

「そう。もう、結構よ」

怪物め。溜息と共にそう聞こえたような気がした。

「分かったと云ったが...」

それでもお前の声で明言してもらいたいことがある。

証拠は一つ一つ集めたが所詮状況証拠ばかりだ。

お前は

私の母親ではないのか」

それが、訊きたかったこと。

そして、覆せない事実である。

確信はしているのだ。

「さあねえ。まずは証拠とやらをきかせてみせなさいよ」

しかしなぜか、彼女は明言を避けた。

否定も肯定も。

注視していたが動揺は見られない。

娼姫の表情ほど読みにくいものなどないだろう。

「まず、私がチャンドラという村に行っていたことは伝えたな」

「ええ、私が幼い頃住んでいたところね」

「チャンドラに行った理由はな、ある事を確めたかったからだ。

領主の館を訪れたのだが、行かなくとも住人に遭うだけで事足りたよ。

私の顔を見た住人達がそろってぎよつとするのだからな。それでも一応領主夫婦に会ってみたさ。

話を聞くだけでも十分だったが、一人息子の肖像画まで残っている、

それはもう素晴らしかったさ。

”殺された”放蕩息子と、失踪した美貌の妹のことを語ってくれたよ”

確めたかったのは私の母親の事というよりは、
私自身のことだ。

”貴方の母親は別の人かもしれない”

”あの女”が云い始めた時には、

何を戯言を。と、思ったがいくつかの根拠を提示されたのだ。
聞いてしまった以上は確めなければ、

気がすまなかった。

曰く、チャンドラという寒村に私に酷似した肖像画がある。

曰く、私の髪は黒だが一房だけ銀色の房がある。

そんな珍しいタイプは滅多にいないはずだが、

ある歌姫は、染めているだけで十数年前は珍しい一房が有名だった。

曰く、私の母上は流産だった。

まずは、父の代の親戚から四代前の家系を調べたが

銀髪のものなどいなかったし一房だけ別の色の髪なんてものを、

特徴としていたものなど当然いなかった。

隔世遺伝というものがあるが信じられなかった。

そこで、次に調べたのが私の誕生に立ち会ったものたちの調査だ。

当時の侍女や乳母に産婆達に訊けば、

嘘をつかれてもある程度伝わってくるものがあると思ったのだ。

大貴族に威圧されて平静を保てる平民などほばいまい。

しかし、それでも確信を持つことはできなかった。

話を訊けるものがいなかったのだ。

居場所が分からなかったのではない。

全ての関係者が死亡していた。

侍女の一人は肺病に罹って病死。

乳母は精神を病み発狂後自殺。

産婆に至っては峠にて盗賊に惨殺されていたという。

出産に立ち会った者達が全て死んでいる。

流石にこれは不自然だと思ったがどうしようもない。

最初は公爵家の繁栄を妬む者の流言だと思っていた。

それを”あの女”がふざけて脚色したということは十分に考えられる。

それに父と母は険悪な仲であつたから、

事実も含まれていてそれが真実味を加味しているのだろう、と。

しかし、父の髪は黒。先年、馬車事故で死んだ双子の弟妹も黒。

死んだ母も栗色だった。

さらに、調査対象が全て死んでしまつていては件の村に行くしかない。

父親に”自分の母親は誰ですか”とは訊けないのだから。

「行きたくはなかったのだがな、

公爵家の跡目の血筋が懸かつていた。

調べぬわけにはいかなかった。

「それで？貴方が私の息子だったらどうするわけ？

家出でもする？」

そんなことはできない。

私が嫡出ではないということを表沙汰にはできないし、

死んだと虚偽の公表をして行方を眩くらますわけにもいかない。

世間での”私”が既に跡取りで、

不審な死に方などをすれば家名や妹に傷がつく故に。

「病であると公表して隠居しよう。」

そうすれば妹の補佐もできる」

幸い妹のエレイナは鼻肩目を差し引いても優秀だ。

良き当主となってくれるだろう。

「まあ、”あの女”はそんなこと許さないでしょうね。

確実に貴方が継ぐことになるでしょう。」

”あの人”とは父のことだろうか。

しかし

「煙に巻かないでくれないか。

私の母だと明言して欲しいのだ。

確信しているがけじめが欲しい。

これまで、ゆくゆくは私が継ぐのだと思って積み重ねてきたのだからな。

渋っているのなら

」

「そうよ」

「な、に」

「私が貴方の母親だって云ってるのよ

構わない。と云おうとした矢先だった。

「何驚いた顔してるのよ。

確信していたんでしょ」

「．．．ああ、それでもショックはある」

それよりもあっけらかんとしたシャーリィに驚いたのだ。

「ついでにもうひとつおしえてあげる」

一瞬、鋭い怖気が走った。

「隠居したあとは妹に継がせる気なのでしょう？

でもね、エレイナは私の子よ」

そうか。

それならば。

私はこの身で継がねばならぬのか。

しかし、それでは

「この前、貴方の弟妹が死んだわよね。

東方式に言えばオクヤミってやつが必要ねえ」

「．．．それならば、まさか．．．母上が病死したというのも

」

シャーリィが嘯くように母上の忘れ形見である双子の事故死が偶然でないのならば、

出産後すぐに産褥熱で死んだ母上の死因にも嘘があるかもしれない。

「それは、分からないわ。」

あの人はおしえてくれなかったもの」

それは、双子が死んだ時にはなんらかの連絡があったということであらう。

そこで、嫌なことに気付いた。

父の言動とシャーリーの行動で不自然な点がある。

「・・・おい。先程私が龍弦琴を演奏した時に、

お前が詠った詩があるな。」

あれの作者はまさかお前なのか？」

気付いてしまったのだ。

父はお前の母親の詩だ。と、云っただけで

私の妻の詩だ、とは云わなかったことに。

「ええ、当然。」

あれは、若気の至りで私があの人に贈ってしまったものだもの。知っているのは今のところ三人だけ。

皇家から下りてきたお姫様には分かるはずもない」

なんといことだ。

幼き頃の暖かな記憶はここで一つの終わりを迎えた。

私の勘違いというこれ以上もない悲惨な終わり方で。

「・・・そう、か」

何も考えられない。

私自身の根底を覆す事実が次から次へと湧き上がってくる。

思い返してみれば不審な点はいくらでもあったのだ。

たとえばそれは、植物になど興味の無い父の書齋に、

毎月必ず美しい珍花が活けられていることであつたり。

父の情報網では分かりそうもない、

貴族の花街での醜聞に関することを父がいち早く察知していたり。

いくらでも気付くべき点はあったのだ。

「それでも”いいこと”が一つだけあるわ。」

知りたいでしょう?」

その表情はこれ以上ないほどに嗜虐的だ。

そして、悔しいことに激しく掻き乱されるそれは淫乱な微笑。

「いい、聞きたく・・・ない」

これ以上私の世界を壊さないでくれ。

シャーリイにとってのいいことが必ずしも私にとってのいいことではない。

否。この場合そんなことは絶対にありえない。

「そんなこと云わないで。」

貴方にとっても関係してるんだから」

こんなに嬉しそうな彼女を見たのは初めてだ。

はたして、私の知る妓女シャーリイはこういう女だったか。

「私が最近客を取ってないことは知っているでしょう。」

それが、どうしてかわかる?」

「・・・気分が乗らなかつたのだろう。」

気分屋が多い妓女のなかでもお前は特に顕著な女だからな」

「残念、はずれよ。」

まったく。女が男と寝ない理由なんて二つしかないじゃない。

一つ目は貴方が云ったやつ。

もう一つは

身籠っているときよ

「・・・それは、私の弟か妹ができるということか?」

「いいえ?ちゃんとソフィアに伝えさせたじゃない。」

前に来た客は、貴方よ」

ということとは、

「・・・どちらにせよ、私は認めない」

「ふふ、そんなこと関係ないわ。」

貴方が認めなくなつてこの子は私と貴方

次期リンダウト公爵家

当主ソロモンの子よ」

私はどうすればいいのか。

目的意識を失い。

縋るべき道である妹の家督継承も絶たれ。

さらに、己すらも不義の非嫡出子を出してしまっただろう。

絶望の淵で月を見た。

世界が全てモノトーンに映る。

これ以上の絶望がかつてこの世にあっただろうか。

しかし、それでも月は綺麗だった。

（後書き）

ここまで付き合っていたいただきありがとうございます
もしも、ここ直したほうが．．．など
奇特なアドバイスを下さる方は
コメントお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9543z/>

逢魔ヶ月

2011年12月29日21時45分発行